
我輩は猫なのか？

着地した鶏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我輩は猫なのか？

【Nコード】

N0915S

【作者名】

着地した鶏

【あらすじ】

自分のことを猫だと言い張る者が、積み上げられた猫缶を前にして大いに悩みながら言い訳がましいことを一人で語る。そんな感じのコメディー。

我輩は猫である。

いや、確かにパツと見は猫に見えないかもしれないが、確かに猫なのだ。信じてくれ。

ああ、もちろん君の言い分はもつともだ。

確かに私は一般的な猫に比べれば毛深くないし、身体能力もそこまで高くはない。

第一、猫らしからぬ二足歩行だ。

君が私を猫ではないと疑うのも当然だと思う。

しかしだ、ちょっと発想を変えてもらいたい。

私は猫は猫でも、所謂「化け猫」に分類される猫なのだ。化け猫なら、二足歩行なのも人間と同じぐらいの背丈なのも納得がいくし、別に変なことじゃないだろう？

ん、化け猫なのにどうして猫耳がついてないのか、と言いたいかい？

ははん、君は世間を飛び交う根も葉もない噂を馬鹿正直に信じてしまったんだな。

全く、呆れてしまうが、本当の化け猫が猫耳だの何だのと昨今の流行に迎合するような姿形をしているわけがないのだよ。

ほら、私を御覧なさい。世間に媚を売るような猫耳なんてついてないだろう。

萌え？ そんなものはどうだっていいさ。語尾に「〜にゃ」なんてもつての他だ。

もちろん、尻尾だつてついてないさ。なんならその目で確かめて

みるかい？

ん？ わかったからその下ろしかけのジーンズを元に戻せて？
ふん、冗談に決まっているだろう。流石に化け猫の私でも公衆の
前で下半身を露出する趣味は無い。

まあ、というわけで私は間違いなく猫なんだ。

一見、色褪せたジーンズによれたTシャツを着た貧乏学生のように
見えるかもしれないが、誰が何と言おうと私は猫なのである。

そもそも猫を主張する私が猫で無いとしたら、一体君は何なんだ
？ 本当に人間なのかい。証拠は？

ほらね、君が人間であるという確定的で絶対普遍的証拠なんてど
こにもありはしないんだ。

君は自分のことを人間だと言う。だから君は人間。それで良いじ
やないか。

だから、いくら私が人間と同じような姿をしても、私自分が
のことを猫だと言っているのだから、私は猫なのだ。

わかったね、私は猫だ。それ以上でもそれ以下でもない。これは
確定的に明らかなことさ。

オホン。少し熱くなってしまったが、そろそろ本題に入ろうか。
今、私の目の前には猫缶がドンと積まれている。先日、友人から
貰い受けたものだ。

もちろん賞味期限が切れているわけではない。ほら、期限までは

あと優に一年以上もあるじゃないか。

どうして友人がこんなものを私に寄越したのかは甚だ不可解である。

奴は猫を飼っていないどころか重度の猫アレルギーなのだから。あの柔らかな肉球を見ただけで泡を吹いて気絶してしまうほどだ。

まあ、おそらくどこかの雑貨屋で大安売りしているのを見て、ツナ缶か何かと間違えて多量に買いこんでしまったのだろう。そして処理に困って、手当たり次第に知り合いに押しつけた……ということとは想像に難くない。

もちろん、猫など飼ってない者にとっては、こんなゴミにもならないものを差し出されても、苦笑いを浮かべたまま付き返すのが普通だろう。

私は猫を飼っていないので猫缶など欲しがるはずもない。だから私も例に漏れず、猫缶の入った重い紙袋を奴に押し返そうとした。だが、そのとき奴は私の耳元でこう呟いたのだった。

「猫缶って、結構イケるらしいぜ」

正直、ここ数日パンの耳で空腹をしのいでいた私の心はその言葉にグラリと大きく揺れ動かされた。そして、気が付けば私の手には重々しい紙袋が握られていて、ヤツの姿はもうどこにも見えなかった。

まあ、そういった経緯で今、私の目の前に十数個の缶詰がタワーをなしているのだ。

そのうちの一缶を手にとってみると、ラベルには『グルメな猫も満足の高級まぐろ缶』と書かれていて、その横には気持ち良さそうに

眠る猫の絵がプリントされている。

他の缶のラベルもどれも似たような感じで、『高級』や『グルメ』といった文字がやけに目につく。

最近の猫は美味そうなもん食ってるんだなあ、人間よりも良いもの食べてんじゃないのか……と一人ごちながら私は猫缶タワーを積み直す。

確かにラベルを見る限りでは、友人の言葉通りどの猫缶も美味しそうだ。

しかし、それなら何故、奴はその美味いという猫缶を自分で食べようとはしなかったのだろうか。

その疑問の答えはすぐに導くことが出来た。

『普通の人間』はいくら飢えていたとしても『猫缶』には決して手を出さないからだ。

今、私は非常に腹が減っている。空腹である。

何しろ月末。財布は小銭がじゃらつくのみで、碌なものが買えない。ここ数日はパンの耳と水道水しか口にしていない。

そんなところに、美味しそうな缶詰が山のように積まれていたら、それを食べてしまいたいという欲求を抑えるのは不可能だろう。

だが、人間が猫缶に手を出してしまうのは何か人として大事なものを失ってしまう気がする。いや、間違いなく人としての尊厳やその他諸々を失ってしまう。

つまり、『猫缶を食べる』ということは、人間にとって越えるに越えられない一線なのである。

だが、しかしだ。その君、私は何だ？ そう、私は猫だ。

猫ならば猫缶を食べて当然だろう。だから、今から私がこの猫缶を開けてむしゃむしゃと食べてしまっても誰も私を批判や軽蔑などしてはならないのだ。

私が猫缶を食べても何の問題も無いのだ。なんたって私は猫なのだ。だからな。

いいか、私は猫だ。化け猫だ。

某グルメエッセイストだって食べたんだ。

彼は人間だが、私は猫だ。だから何も問題は無い。

彼の話では味が薄味らしいから醤油でもかけとけば大丈夫だろう。さあ、食べるぞ。猫缶を食べるぞ。艶々光る本マグロペーストを食べるぞ。

そのクリーム色のペーストに醤油をたらし。そして箸をむにゅっと挿し入れて、そのままぐっと持ち上げる。

そして口元までゆっくりと持ち上げる。臭いはよく分からない、緊張のせいだろうか。

さつきから心臓がバクバクと拍動して、ドクドクと忙しく脈を打っている。

何を緊張することがあるんだ。私は猫だろ。そう、猫が猫缶を食べても何の問題も無い。

猫である私が猫缶を食べるなんて鰹節がカツオで出来ているくらい当たり前のことだ。

だから……だから、私は猫だから……猫だから猫缶を食べるんだ
あああああああああ！！

ゲフッ……ご馳走様でした。

(後書き)

どちらかと言つと、犬派。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0915s/>

我輩は猫なのか？

2011年10月5日20時27分発行